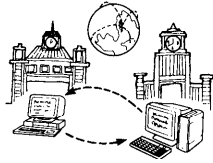


巻頭言



「超」情報システムをめざそう

—多様性と複雑性への挑戦—

久保 隆重†



日本のコンピュータビジネスは経済不況に加えて、驚異的な処理能力をもつコンピュータシステムの登場による構造不況のダブルパンチをうけ、その歴史のなかで初めての変革期に遭遇している。

本学会の諸活動は、これまでの日本のコンピュータ/情報産業の発展を支えてきた。また逆にこれらの産業の発展が本学会の成長を支えてきた面も否めず、増加し続けてきた学会員数もコンピュータ不況とともに停滞している。

本学会の最大の構成メンバーは情報システムを構築するためのシステムエンジニアであり、学会員の70%を占めると言われている。本学会の新たな発展のためには、システムエンジニアの活動領域である新しい情報システムのフロンティアを開拓してゆくことが期待される。

このため将来の情報システムに関してWHAT?とHOW?の両面からの挑戦が必要である。言い換えれば、社会の新しい要請に応えられる「超」情報システムの目的と姿を明らかにし、その構築技術の開発に貢献することが本学会に課せられた急務であるといえよう。

まず最初のチャレンジはWHATに対するものである。これからの「超」情報システムの目的は?またそれが生み出すべき価値は何か?を明らかにすることである。構造不況の今こそ、従来のように情報技術からの発想だけでなく、情報システムの生み出すべき「価値」からの発想により新しいシステム・コンセプトを創造し、「超」情報システムへの突破口を開きたいものである。

社会の求める価値には重厚長大、軽薄短小、美感遊創などのさまざまな価値軸があり、経済社会の変化に対応して変遷している。変化し多様化する価値軸に対応する製品やサービスを効率よく生み出すため、「超」情報システムが新しい社会や産業の情報インフラとして必要となる。

特に美感遊創で代表される価値は、人間の知的活動を支援するマルチメディア時代の主要な価値軸である。知的活動の多様性、人間の特性の多様性から、製品やサービスに対する機能的要求は本質的に多様化する。

このような多様な価値要求に対応する製品やサービスを効率的に提供するため仮想企業（バーチャルコーポレーション）という概念が現実のものとなり企業形態も多様化し、ベンチャー型企業が勃興しよう。このような産業のインフラとしての広域情報システムプラットフォームの上に仮想企業の多様な仮想情報システムが構築されよう。

いずれにせよWHATへの挑戦は価値の多様性への挑戦といえる。このため人文科学系の経済学、法学、社会学、文学、教育学や医学、芸術領域などとの融合領域も拡大する必要がある。これらとの学際領域での活動を活発にしてゆきたい。

第2のチャレンジはHOWに対するものである。これまで情報システムは大変な困難をともしつつ構築されてきた。現在の大規模情報システムの複雑性は開発の限界に達している。

「超」情報システムでは、人間や組織社会から機能的ニーズやヒューマンインタフェースの多様化に 대응するため、その複雑性が一層増加しよう。

いずれにせよ、これらの複雑性を緩和するには情報システムの様々なレベル、特により高位のコンピュータプラットフォームやアーキテクチャの標準化による複雑性の包み込みが必要である。

また複雑性のなかに規則性や再利用できるパターンを見いだして複雑性を緩和するための新しい方法や技術が求められている。このようにHOWへの挑戦は設計の複雑性への挑戦といえる。

社会の要求する最大の多様性を最小の複雑性で実現するため、WHATとHOWの両面のバランスのとれた本学会による挑戦なしには「超」情報システムの実現への道は開かれない。

(平成6年9月20日)

† 本会理事 日立西部ソフトウェア(株)